
酔拳

R Y U

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

酔拳

【Nコード】

N8292E

【作者名】

RYU

【あらすじ】

医者であり武術の達人黄鴻飛は宮中にて働いていた

蒼龍 四神を纏えし者 其の巻 始まり

昔昔あるところに、それはそれは気の強い暴れ者の男がいました。男は小さな山の木こりの息子でしたが、親の手伝いなどせず毎日里の男の子を見つけては殴り飛ばしていました。男が十と五の時里にいる若いもんで男に逆らうものはいませんでした。ある日から男は山を通る旅人を次から次と殺して行き、金を奪っていきました。男は一月も立たぬうちに村の豪族となり、村を自分の国にしてしまいました。男は兵を率い近隣の村、町 拳句には国まで相手にし占領していきました。逆らうものは例え女子供であろうとも容赦なく殺し。男の悪口を言うものは広場で毎週さらしくびにされていきました。気が付くと男はこの地の半分近く制していました。

ある日男は町に火をつけ、逃げ惑う人々を見つめながら、何時もの如く服従する者にのみ酒を振舞い、逆らうものには死を与えていきました。

男の前に女が現れました、女は黙ったまま男を見つめていました。何時もなら殺してしまうはずなのですが、男は女を見つめると天を仰ぎグイッと酒を飲み乾すと酒を注ぎ女に渡しました。

女は男を見つめたまま酒を飲みました。それを見た男は大いに笑って女を嫁にした。しばらくのうち男はあまり戦いに出なくなりました。男が出なくとも国は拡大していった。男が手を下さなくとも兵、民は男に忠誠を誓い国は豊かになっていった。男が睨めばそれは死を意味し、男が微笑めばそれは繁栄を意味した。男が神を名乗れば男は神に成り得た。

男に子供が出来た。男も女も子供を溺愛し、男は子供を神の子とし国中であがめさせた。子供はすくすくと育ち容姿端麗な知性に溢れた子に育った。男も女も幸せだった。

ある日一人の神官が男に申し出た。申し出によると子供は男の子ではなく女の側近の子だというのだ。男は神官を殺し側近を殺し、

その事を自分の胸にしまいこんだ。しかし日が経つに連れ子供は側近に似て行き男は子供を愛せなくなった。男は子供を殺した女は泣いた。男は戦いに出かけた。国に帰らず何日も何年も・・・ある夜男は部下の勧める酒に毒が盛られる、男は血を吐きながら部下を殺していった。然し毒を盛られた体では思うように体は動かず部下達の剣が体を刺した。男は泣きながら馬にしがみつくと森に消えていった・・・

焚き火の温もりで男は目が覚めると、傷口は手当てがされいた。しかし男の体はまだ起き上がることもままならなかった。笛の音と二胡しらべにのり歌声が聞こえてくる、男は眠りについた。朝になると男は死体の山に埋もれていた。異臭の中男は肉の塊からはい出でると、見た事も無い光景に困惑する。男が出てきた塊は人のそれではなく、又今まで見聞きした動物のそれともなく異形の物であった。男は恐怖を覚え母の名を叫んだ。すると男は子供となり森にたずんでいた。男は目を疑った、すると男は城の中に移り子供が死んでいた。男はしばらく我が子を見つめると目をつぶった。目を開けると男は戦場にいた、男は敵味方無く殺していった。城に向かい殺していった。城に戻ると、自分の座るはずの椅子には見た事も無い男が座っていた。そしてその横には年老いた女が座っていた。女は男を見ると泣きながら抱擁を求め、我が子が、男のいない間国を治めたこと告げる。男は雄たけびを上げ女を殺した。目が覚めると男は肉の塊の中にいた。二胡の音が流れていた。男は塊から抜け出そうとするが、いくつもの手が男を掴んだ。男は手を振り払い塊から抜け出した。男の前に一つの桃が落ちていた。男は桃をかじると涙が止まらなく出てきた。次の朝、男は塊に火を放ち胡麻の種を作ると旅に出た。そしてそれから、男がどうしたのかは誰も知らない。

蒼龍 四神を纏えし者 其の式 宝物庫

大陸の南に位置するここ秦たいらん爛しんに秦の国の宮中がありました。秦の国は大陸の四分の一を占めるそれはとても大きな国でした。狭キョウという民族と措そという民族と魏ぎという民族が長い争いの末、参議協定という条約を結び共通の言葉、字を用いる事で一つの国となりました。その地に暮らす百十二の民族もそれに従い、秦は全世界で一番大きい国となったのです。そして秦を治める帝様は、甲こうという小さな民族に生まれながらも非凡な才を持ち。天子様より天命を受け、大乱の覇者となり仏教を元とした学問 天智経典を作りました。それから四百年、世界は変わり又秦も国土の大きさこそあまり違えども、その中身は変わりかけていました。溢れかえる人々、天地経典の教えは外国には通用せず。若者は金を求め、年老いた者は政治に目を細め異教に神を求めました。科学の力が大きな内乱も世界の大乱も抑止し緊張と均衡を保っていたのです。

そんなある夜の宮中、黒装束の二人組みが、お城の宝物庫に忍び込みます。二人組みは互いの手のひらを重ね前と後ろを見ながら進みます。なにかあつた時二人組みは手を離し対応するための合図でした。宝物庫の前には兵が三人立っていました。黒装束の二人組は左右に分かれると一人は鎌で兵の喉を裂き、もう一人は棒で二人の兵の喉を抑え壁に押し付け鎌を持った男が二人の兵の喉を切り裂きました。二人組は音一つたてられませんが。音をたてれば回りの兵達がやってくるからです。二人組は懐から鍵を出し宝物庫の鍵を開け宝物庫に入りました。

「兄様見るよ、金の延べ棒に真珠の指輪、翡翠ひすいの玉印もある、ん！・・・こつちもすげえ

ぞ銀の食器だ」

黒装束の男いや馬蛇黄マオジャキは目の前の宝の山に目をきらめかせ手にとつて眺めたり臭いをかいたりしました。

「蛇黄、我等の目的は天地動転の玉」と兄の文諭は言つ。てんちどうつてんのたま

「チエツ、判つたよ兄様」

蛇黄は兄馬文諭マオブンユの言葉にしたがいうらめしそくに宝をどかしながら玉を探しました。

「・・・？蛇黄」

文諭は何かをみつけた。

「見つかったのか兄様」

「少しくらいなら持つていってもかまわんか」

文諭は一つの古びた鎧を指差しました。

「四神の武具だ」ししんのかぶと

「四神の武具？」

蛇黄は驚いた。

「蛇黄、矛盾の語源を知っているか」

「矛盾の語源？・・・あああれならわしとて知つとる、どんな盾も貫く矛とどんな矛も貫かぬ盾を売

つていた商人にどちらが強いんだって問いただしたところ。何も言い返せなかつたところから、二

つの相對する事柄を同時に出し不条理にこじつけたつて言つあの話じゃろ」

蛇黄は答えた。

「そうだ、もし本当に最強の矛と、最強の盾を手に入れたとしたらどうなる」文諭は言つ。

「そりゃー無敵だろうよ、どんな盾も貫く盾と、どんな矛も貫かぬ盾があれば・・・？それがこの四神の武具なのか」

と蛇黄はいつた。

「ふっ」

文諭は目を閉じ見開くと舞いながら歌いあげました

「天に地に乱れる処鬼現れる、鬼現れる処四神、武具と成りて天子の下に集

まれしは東方より蒼龍、西方より白虎、北方より玄武、南方より朱

雀。天子天に蒼龍の剣を掲げ白虎の兜を被りて雄叫びを放てば、玄武の鎧が鬼の牙をもはじかぬわ。いざ戦地に赴けば朱雀の足枷が火を吹き地を飛び回る。天子阿修羅が如く地はもとより山河、天に到るまで鬼出処いずるところ駆け巡る。民の城に隠れし鬼天子逆鱗に触れ、天の雷を持ってこれを封じせし」文喩は唱え舞を終えるとゆつくりと立ち上がりました

「ふっ・・・まあこんなところだ」

「ふーん、鬼に天子様か・・・まるで神話か御伽噺みたいじゃない」目を丸くぱちくりしながら文喩と鎧を見比べながら蛇黄はいいました。

「確かに、俺もそう思っていた。もしあつたとしても錬金術の進んだ今、

それよりはるかに硬い素材は発明され、現代の武具にかなうとは到底思えぬ・・・が、こう目の前にすると・・・なるほど・・・」文喩は頷きながら静かに言った。

「どうしたんじゃ兄様」文喩は目を細め微笑むと蛇黄に振り向きました。

「欲しくなった」と文喩はいった。

「じゃあこれが言い伝えの四神の武具なのか」

蛇黄は腰をかがめ鎧の周りをグルと回りました。

「・・・ふっ、蛇黄邪魔だ」文喩は自信げに言った。

「あ、おうおう」

そう言つと蛇黄は体をそらし両手を前に広げました。文喩は横に置いてあつた剣を掲げ鎧を真っ二つに割ってしまいます。蛇黄は前に出した両手を引っ込め目を大きく見張り鎧を見つめました。

「に、兄様いいのかよぶち壊しちゃって」

「本物だがやはり当時の強さであつたのだろう・・・しかし・・・」文喩はしばし右手に握つた剣を見つめると大事そうに元あつた所に戻しました。

「でも美術的価値とかあつたんじゃねーのか」

蛇黄はもつたいなさそうに鎧を見つめてました。文諭は鎧の飾ってあつた台から巻物を取り出しました。

「三巻？・・・蛇黄いくぞ」

そういうと文諭は巻物を風呂敷につめ腰にしまいました。

「え！あつ？まったく兄様は・・・つま、わしはわしで適当に見繕つてくか・・・まずはこの金の

延べ棒に、そして剣・・・」

「蛇黄何をしてる早く探せ」

「わかってるって兄様・・・おつとこの首飾りなんか姉さまにぴつたりじゃ・・・こつちの石も・・・

うーん？これは・・・兄様、兄様！」

「どうした蛇黄、見つかったのか」

蛇黄は赤い石を手にならずきました。

「まさしくこれぞ天地動転の玉、でかしたぞ蛇黄」

「この玉と姉さまの術があれば・・・」と蛇黄はいった。

「曲者が忍び込んだぞ」兵が叫んだ。

「兄様！」

二人は立ち去ろうとしますが宝物庫前で帝兵達に阻まれました。蛇黄は両手の鎌を振り回し、文諭は身の丈以上の棍棒で帝兵達をなぎ払い右へ左へ立ち去りました。

蒼龍 四神を纏えし者 其の参 王子の部屋

翌朝宮中では大騒ぎでした。結局賊を取り逃がし、帝兵を三名も無くした事で朝から臨時に政が行われることになりました。そんな中何も知らされていない王子は前の日の勉強の続きと、ウオン黄クイイン硅胤から教えを授かっていました。

「・・・につき去年に引き続き年貢は低い徴収となり、前年同様税金で補う事となります」

「毎年安定した年貢の調達がままならぬのなら、年貢を米に限らず主食となりうる麦、治水のいらぬトウモロコシ等から管理すればよいだろう。なにも魏のやり方を伝統という言葉で、頑なに守らぬとも・・・倭わの島国では白人に習って買物をするたびに税を払わせているらしいが、民はキャンキャン言ってるそうだ。目に見える金よりも、見えにくい汚いやり方はいくらでもあるのではないか」
王子は尋ねた。

「確かに目に見えにくい徴収も、民に分かり辛くその場凌ぎの国益には繋がります・・・鴻飛！」

王子の部屋の片隅でうとうとしていた、ウオフエイフオン黄鴻飛はびっくりして大きく開けました

「んあ、なんだー親父」

「お前は王子に何を吹き込んだ、ロシアの共産的思想とアメリカの合理主義を、混ぜ合わせたような適当な事を言いおって」

「はあ？何だつて全然意味わかんねーけど」

「鴻飛こないだ話した年貢の根本的打開策だ」

王子は腕を組み言いました。

「何？年貢の話？そりゃー親父のほうが良く知ってるよ」

「食糧管理と年貢を一緒にするとは何事だ、まだそんな下らない事を言ってるのか。お前の個人的見解を王子に述べてどうする。王子にはきちんと天地経典を知ってもらはなければ成らない。秦の今日

があるのもだ。代々天地經典を修められた帝様が政、外交を行って築き上げられたものだ。それを子供の頃私に話した夢夜這い話を話すなど、そもそもお前は天地經典の主軸となる・・・」

硯胤は目を吊り上げ、鴻飛に迫っていききました。

「ちよつ、ちよつと、な、な、なんなの王子親父あんなに興奮してるの」

鴻飛は壁を蹴って硯胤の頭上をくると回ると、王子の机に着地しあぐらをかきました。

「鴻飛無礼なるぞ、どけ」

王子抜き手で股間を狙うが抜き手で阻まれる、つかさず抜き手で顔、左肘、右膝、両足首を突く、鴻飛よけながら右に宙返りし床にあぐらをかいて着地しました。

「悪い悪い。で、なんで親父あんなに怒ってるの」

「何時もの事だろう」

王子は呆れ顔で硯胤の顔をチラツと見ると言いましたた。

「ガール」

「ああ、何時もの事だ」

硯胤の凄んだ顔見た、鴻飛は王子に頷きました。

「この間俺に話しただろう、米以外に麦、トウモロコシも入れた、秦の主食を年貢として徴収したらの話だ」

「あん？おうおうあれか、なんだ親父、年貢分主分散徴収式なら、親父もいいなあって言ってたじゃねえか」

「鴻飛お前は何時の話をしてるんだ。五歳の子供にしては・・・というより五歳の子供が可愛く言ったから合して言ったんだろうが・・・本当にあんな昔の事を、いまだに良く覚えてるといっつか、なんと言っつか、とにかく下らぬ事を王子に吹き込むな」

「なーんだよ、おいつたく天地經典が万能ってわけでもねえのによー」

「鴻飛」父は又、怒鳴った。

そんな中一人の兵が部屋に入ってきました

「硅胤様帝様がお呼びです」

「分かった、では王子・・・鴻飛」

「何？」と鴻飛は振り返った。

「帝様からのお呼びだ」

その言葉に鴻飛は目を細めました、それを見た硅胤も目を細め頷きました。

「俺はいいよ、王子の面倒見なきゃなんねーし」

「俺は子供か」

王子立ち上がり鴻飛に足刀、鴻飛体を反らしてよけそのままハンドスプリングで立ち上がります

「鴻飛」

「んあ」

王子の回し蹴りに鴻飛は、不意をつかれ膝を着きました

「やっと当たったか」王子が笑いながら言う。

「しっかり頼むぞ」

硅胤はそのやり取りに、呆れ顔で首を横に振りながら部屋を出て行きました

「鴻飛続きだ」

「ん？何の」

王子は机と鴻飛を見比べ天井を見つめると言いました

「型だ」

王子は足を広げ腰を落とし両手を握り腰に構えました。

「OK」

鴻飛も前転し同じ構えを取ります

「まずは準備体操、足を揃えて真っ直ぐ立つ腰の拳は開いて脱力。ゆっくり息を吐いてー止める。ゆっくり息を吸いながら両手を頭上で重ねる」鴻飛は言いながら

鴻飛は王子に武術を教えました。黄家は代々宮中にて食医として勤めておりました。

食医とは王族の健康管理そして食事の管理ですが、黄家はここ十数

年不在となっている武術至難も兼ね又泰爛東方警邏（見回り）と東方門下警備の任務もつき政にも加わっておりました。そんな多忙の黄家、親子二人では到底まかりきれぬものではないのですが・・・鴻飛は宮中の仕事はあまりせず部下に任せ王子とよく遊んでいました。したがって父硅胤が先ほど怒ったのも何時もの事だったのです。

蒼龍 四神を纏えし者 其の四 宮中通路

「硅胤・・・四神の巻物については、まあ・・・鴻飛に・・・」
帝様は祭殿と寝殿を結ぶ橋から見える宝物庫を横目に進み、真中くらしいに進むと下に流れる川の音を見つめました。

「問題は、天地動転の玉ですか」

硅胤は目を細め宝物庫を見つめました

「うむ、朱雀 明暝様ミンメイより託されし天地動転の玉。もし明暝様のよ
うな術者の手に渡れば・・・」

「そしてもし術者が悪しきものなれば・・・地は割れ、天は太陽を
隠し民は光を失いまする」

硅胤は帝様に続きました。

「・・・悪しき者の手に・・・渡ればな。」

帝様は顔を上げ寝殿に足を向け歩きはじめました。

「然し硅胤、賊が金品を盗んだ中にたまたま天地動転の玉が紛れ込
んでいたのかも知れぬ」

「そう考えたいのも分かりますが、賊は四神の武具を壊し巻物を手
に入れておりまする」

硅胤は帝様の前に回り込みました。

「ふむー、天地動転の玉は主を選ぶ。余は・・・」

「帝様！世を乱すも世を正すも人でございます。すなわち絵を
書き事を起こし、人を結ぶものあらば、これ何にしても見過ごす事
あらず。」

「個をもって体となし動すれば闇、光にいずる・・・か、硅胤」
「はっ」

その返事に帝様は耳たぶを摘むと、その場を二周三グルグルと御自
分の足先を追い駆けていました。目を大きくし首を掲げたり、又つ
ぶつては立ち止まり大きく目を丸く広げくると回し大きくた
め息をつくと又その場を今度は逆方向に回り三、四周すると、硅胤

に背を向けた状態でうんうんと頷き手を耳から放すと、硯に振り向き何回か硯の目を見つめ直し、深いため息をつくと思を決したように大きく息を飲み天井を見つめながらおっしやいました。

「昨日我が城より盗み出されし天地動転の玉、四神の巻物ならびに金品全て全部一月の内に余の元に取り戻す。これを民に広く知らせ一月の内に取り戻す．．．あつてもなくてもな」

「名案かと下手に隠し立てをし工作に労をせいせずとも、公にする事により広く民より情報が得られます。又、期日を取り期限内に取り戻したとあらば、民の信頼も得られます」

硯は頷き答えました。

「民の信頼か．．．」

残った息を吐き出すと口元を上げ目を細めながら首を横に二、三度振り硯と目を合わせると、ゆっくりと見開き、淡々と優しくそして確りした口調でおっしやいました。

「硯、明日公開処刑を執り行う、適当な兵を二、三名用意しておけ」

「帝様？」

「宝物庫ならびに城の警備の失態、誰がどう責任を取るのだ」

「しかしながら．．．」

「どうせ偽りの信頼ならば、真の余の．．．いや秦の闇を見せねばならぬ」「心の有り方を現すのですか．．．ならば他にも．．．」

硯の発する言葉をさえぎり帝様は言いました。

「無い．．．これでいいのか硯」

ゆっくり振り返ったその目に硯は思わず目をそらし後ろに一歩たじろぎました。

「帝様」

「．．．礼を言う硯、明け方から続いておる政、お前との二、三言で話がついた。血の繋がりが無い者のとの方が話が早い。」

「帝様．．．私はただ帝様の望むがままに言わされたにすぎませぬ」

「言わされたか．．．情けないのー、人を使わねば余は己の闇を出

せぬ」

「帝様、私は好きでございます。帝様のそのスタイル。帝様の間
は秦の間、帝様の問題は秦の問題、然しながらその答えは安易に口
にする物でないと私も思います」

「・・・スタイルか・・・硅胤」

「はっ」

「生意気に余を見下しおって」

「帝様」

「ふっ・・・冗談じゃ冗談ハッハハ・・・」

「帝様」

硅胤は帝様を見送ると、しばし橋の真中で呆然と立ち尽くしていま
した。そして川の音に呼び戻されると、大きく息を吐き目を見開き
宝物庫を見つめました。

蒼龍 四神を纏えし者 其の五 白蓮経

宮中より西に二十里離れた所に五階建ての建物が七つ円をかくように立っています。泰爛代十四集団居住区というのが正式名称なのですが、人々は垢岱住と呼んでおりました。ここには華という部族多くを占め、その民族が元々住んでいた土地、泰欄から二千参百里ほどの所に崖袈という山があり、この山の頂にだけ咲くという赤い葉の木の名から取ったという事です。

華の民族は、高原に住み風を神と崇め遊牧とその地を通る旅人から通行税を取っていました。今から五百年程前 鄭の侵略によりその数は減り、散々になってしまいましたが、それでも純血に近い民族として生きながらえてきました。今は参議協定が結ばれ華のような民族達の言葉は消え、昔の事も大きな図書館に行かなくては知ることも出来ませんが、他の民族とは、やはり何かが少し違うようでした。当時はよく争い事が絶え間なく、二百五十年程前秦はその繋がりを尊重し、八大都市に居住区の住み分けを執り行ないました。これにより治安が大幅に良くなったという事です。

そしてここ垢岱住中央広場では屋台が並び人々の生活を支えていました。そんな一角に小さな小屋があり、その裏手には六畳ほどの台が置いて在りました。三年程前から時折、夜この台の上でなにやら怪しい儀式が行われていました。

そして今日も日が沈むと四十人程の人々が台の前に集まっています。一人の仮面を被った男が台上上がると、片手に短剣を持ち舞を舞い始めました。すると人々は手を合わせ祈り始めました。

人々 「白蓮信教世に現れる、白蓮信教世を正さん、白

蓮信教天現れる、白蓮信教天昇る・・・」

仮面の男が舞を舞い終わると、小屋の戸が開き二人目の仮面をつけた男が人を抱えて立ち、後ろには桃色の鳥の刺繍の入った着物を纏ったとても綺麗な女が初老の男の手を取っていました。人々は小屋

の前と台の間から退きました。三人は人々の作った道を歩き、台にあがります。人々は祈りながら仮面の男が抱きかかえている人を見つめていました。初老の男が、最後に台に上がるとにっこりと微笑みながら一人一人の顔を見回すと言いました。

「今日又ここに天に帰りし者がいる。しかし地の民よ悲む事なかれ。我が白蓮の血が天に帰れし者に別れの言葉を告げさせん」

そう言う初老の男 馬マオ 歌玖カクは右手を広げ天に掲げました。

「白蓮の聖なる血を受け」

台の上の女馬マオ玉玲キョクレイがそう叫ぶと、仮面の二人 文喩、蛇黄もその続きました。

「白蓮の聖なる血を受け」

三人は交互に叫び、術を完成していきます。

「天昇る者、今再び地に戻れし」

「天昇る者、今再び地に戻れし」

「みなに告げよう、別れの言葉」

「みなに告げよう、別れの言葉」

叫び終わると蛇黄は歌玖の横に片膝をつき、舞いに使った短剣を渡しました。それを受け取った歌玖は、短剣を天に掲げた手の中指に押し当てると、ゆっくりとその手を胸のところを下ろしました。玉玲は歌玖の指から流れ落ちる血を筆に含ませ、紙に梵字を書き文喩の抱える人 死体の顔にのせました。

「オン マユキリ イン アラ ソバカ」

玉玲は手を合わせ唱えました

「天に旅立つものよ、今一度地に降りてみなに別れを告げよ」と歌玖が言う。

「みなに別れを告げよ」

「さあみなを祈るのだ」

「祈れ、祈れ」

人々は白蓮経という宗教の信者達で、今日その信者の一人が死んでしまったので告別の儀式を行っているのです。

「白蓮信教世に現れる、白蓮信教世を正さん、白蓮信教天現れる、白蓮信教天昇る、白蓮信教地を清めん、白蓮信教光に闇を、白蓮信教闇に力を、白蓮信教・・・」

信者達も叫び、祈りを術者玉玲に届けました。

信者達の祈りが巫女の術を通し、死者は蘇り立ち上がりました

「みなもの者しずまれ今白き蓮の子采ツァイ 晋宵シンソウは再び地に降り立った」と歌玖が静かに語った。

「今我天に帰る、父よ母よそして地の民よ聞くがいい。我白き蓮の花びら一つとなりて、御釈迦様のもとに帰る。これ全て事の理なり、しかし地の友よ我追って天に昇る事なかれ。地に咲く白き蓮の根となり、葉となり又花びら一つ一つとして、生きて世を正すが勤め。白蓮の名の下に集えし子よ、御釈迦様の教えを元に世を正したもうれ」

死者は言葉を伝えると、目をつぶり土に帰りました。

儀式が終わると、死者の家族達が台に上がり、信者達に深々と何度も頭を下げました。そして、その土を壺に入れました。

台の上から家族が去ると歌玖は話し始めました。

「信者の皆様方、今日はお忙しい中采さんの為にお越し頂き大変感謝いたします。生前の彼とは私個人としてはあまり存じ上げませんでした。文諭が働いております製鉄所で所長さまをやられていたそう。大変可愛がって頂いたらしく、四年前私ども家族がここ泰爛の北門をくぐり、あまりお金がなくなった頃、私達家族のため文諭に前借も快く取り計らったとの事で、一家の主としてなんお礼も出さず恥ずかしく思います。この場を借りお礼を言わさせていただきますと思います。采さんあの時は本当に有難う御座

いました。さて、信者様方の日頃のご活躍は色々な形で私どもの耳に入っております。皆様方のご活躍により私は今日新たな道を民様といっしょに歩んで行きたいと思えます。千五百年前、御釈迦様のお残しになった二百十五の経典の中から、三十一の経典に手を加

えたのが我らの經典、白蓮經七星典ビャクレンキョウシチセイテンです。この經典の中に心神効形シンシンコウキョウという物があります。これは魔法、法力、仙術などを記したもので、今やりました死者蘇生術もこの中より学んだものにございます。皆様も知つてのとおり術や法力は異界の人々しか使えませぬ。しかし、昔まだこの世が神様の闇の一部だった頃、異界やこの世、あの世は混沌と黒い世界でした。その時代の事は様々な形で各地で神話として残されており、その話の中にいくつも神や魔物、悪魔などと交わった人間達の話が出てきます。そしてその子孫達は歴史にも知るように、時代の節目節目にこの世に転生いたしております。秦の言葉でいう仙子センシで御座います。我が娘玉玲も、十二の時に仙子として神より力を授かりました。私達家族は秦欄の北西にある小さな村に住んでいました。私は皆様と同様白蓮經の一信者でしたが、玉玲に授かったこの力を世のために役立てねばと導師ドウシとなり白蓮の教えを広めるためここ秦欄にやって参りました。そして昨夜皆様方の日頃の祈りが天に通じ、私の夢の中に御釈迦様が現れ世の貧困を救うべくこの玉、天地動転の玉を譲り受けました。これは本来帝様の下にあつたのですが、時の命によりお釈迦様を通して私の枕元へ運んでくれたのでしょう。信者の皆様方、この天地動転の玉と心神効形そして我が娘玉玲が今から奇跡をお見せいたします。この玉を持つてすれば天の雨も、地の民に味方するでしょう」

歌玖の語りが終わると、蛇黄と文喩は信者達に祈らせました。

「白蓮の名の下に集まれし地の民よ、信じるのだ、祈るのだ。白き蓮の花は信じる者にのみ咲く。祈つた者にのみ咲くのだ」

「白蓮信教世に現れる、白蓮信教世を正さん、白蓮信教天現れる、白蓮信教天昇る、白蓮信教地を清めん、白蓮信教光に闇を、白蓮信教闇に力を、白蓮信教・・・」

信者達は今から起ころうとする、歌玖の言う奇跡に心を躍らせながら賢明に祈りました。

「天地動転の玉よ我に力を与えたもうれ、私の願い聞きたもうれ。
オン マユキリ イン アラ ソバカオン マユキリ イン アラ

ソバカ」

術者玉玲が天地動転の玉を胸元に掲げ最後の呪文を唱え始めました。

「地の民よさあ祈るのです、信じるのです」

歌玖は目を見開き、信者達に訴えました。

「祈れ祈れ祈れ」

蛇黄も文喩も、歌玖に続き信者達に訴えました。

「祈り手姉さまに力を」

「力を」

「力を」

「力を」

三人は大声を張り上げ叫びました。それに応え、信者達はより一層に一心に祈りました。

信者達の大半は華の民族で元々仏教では無いのですが、風を神と崇め仙子の使う術をそれはそれは大事に扱っていました。又術者の力も祈りで大幅に変わることを知っていました。歌玖がここ垢岱住に拠点を置いたのも華の民族の力が必要だったからです。

「天は」

玉玲はゆっくりと目を開きいきました。

「天は」

三人は玉玲の課を覗き込み、息を吞みました。信者達も祈りをやめ、玉玲の次の一言に真剣な眼差しで見つめました。

「我らが祈り・・・聞き入れたり」

そう言くと、玉玲は目を見開き両手を天に広げました。すると空に輝いていた月と星は黒い雲に覆われ、天が一瞬光輝いたかと思うと、地を割るような雷鳴が響き大雨が降り始めました。

『天候奇術』これこそが天地動転の力でありました。

信者達はこの奇跡に歓喜の雄叫びを放ちました。

次の日鴻飛と王子は何時もの如く街に繰り出していました。鴻飛いわく王子の課外授業という事ですが・・・

「本当にいいのか？」

王子は鴻黄横目に言いました。

「いいっていいって、親父の許可なんかいちいち取らなくなつて。それに親父なんだか特別任務にいたらしく、俺にも話してくんないんだよ。」

無論特別任務とは、宝物庫から盗み出された天地動転の玉などの取り戻しと今日行われる宝物庫ならびに城門警備不備による公開処刑の立会いであつた。砧胤はそれとは告げず出かけていました。

鴻飛たちは宮中より東二里程の所に泰爛東中央市場にきていました。

秦は泰爛のような宮中を中心とした都弓千とぎゆっせんという八角形の巨大都市が三二あり、各都弓千は巨大な城壁が敷かれてました。三二の都弓千の間は生産業が行われ、きつい仕事例えば開拓、掘削などは罪人が行い比較的軽い農作業、放牧などは土地を与え小作人を雇いいわゆる領主として秦の指定する作物を作り。その八割を納税するという等法とつぽうほうん不分別という形式で領主と商いをしていた。又領主は与えられた敷地内での作物の精作は自由となつており、指定の分だけ収めればあとはどれだけ作つても、何を作つても制限なしであつた。領主は特産物や他の領主に作物を売つたりしてお金を作つて小作人達に賃金を払つていたのです。さらに小作人たちまた宮中の成人男性は何を買つても売つても自由でしたが一個人もしくはその家族が運営する商売は五割を国に収め小作人を使用した者には二割を税として収めさらに色々な取り決めを交わし商品販売の価格の設定も利潤は三割までと決まっていた。これらは民に金銭的差別の減少と、金銭的権力の軽減におけるものでした。又ここで昨日王子と砧胤の会話で出てきた年貢について説明しますと、秦の財源の四分の一は年

貢でまかない、米は各都弓千の物価になっていました。米一升が三眼^ンというのが目安となっていました。各都弓千には帝と血の繋がった神官達はその人口に見合った米を所得し、差別化を計りつつ五年に一度帝様自ら人口の減少した都弓千に宮中を移動し建て直しを図られておりました。三年前から泰爛は自給率が衰え米一升が八眼と倍以上となりそれに伴い犯罪が増し、人口が減ったのでした。

「王子質問です、なぜ私たち人間を含め生物は生きてるのでしょ
か」

鴻飛と王子は白と緑の着物で人ごみに混じっていました。王子も鴻飛と街に出る時は何時も民と同じ服で出かけます。王子という事を隠す事により、色々都合の良い事があつたからです。もちろん護衛も王子と距離を取り私服で司法にまぎれております。

「はあ？」

鴻飛のらしからぬ一言に赤犬の雑炊を詰まらせそうになった王子でした。

「分かりませんか王子・・・そうですねちょっと難しいですかねー」

鴻飛はヤモリの串焼きを食べ終わると、その串をくるくる回しながらニヤニヤと王子を見つめながら続けました。

「うーん時間を与えましょう、百数える間に答えてください。いいですねいきますよ、いーち、にーい、さーん、ひゃーく、ハイ答えは」

「ゴホガハ・・・、はえーよ」

王子は鼻から噴出しました。

「はえーよ？うーん確かに人生というものは天に輝くそれに比べれば悲しいほどにはかない」

王子のリアクションを全く無視し、鴻飛は語り始めました。

「鴻飛違つぞ俺は数えるのがはえっていうか、飛ばしすぎだろ」

鴻黄は自分の世界に完全に入り込み、語り続けています。

「そのはかない中でも人生というのは生きていかねば成らないのです。六十年でも一週間でも」

「きいてねえーし」

王子は口を半開きにし、人差し指で頬をかきました。

「そもそも時間というものは」

鴻飛の演説は止まりません。

「だ・か・ら」

王子は箸で鴻飛の串をつまむと、目の前に突きつけました。

「勝手に話を飛ばすな」

「うん？」

「つまいい、それにしても何なんだこの人の山は」

「ああここは市場ですからね、泰爛の胃袋みたいなもんですよ」

「胃袋？」

「そう胃袋、生物が何故生きていられるかそれは食べるからです」

「は？」

「王子も物食べないと死ぬでしょ」

「うん？ああ」

王子は鴻飛の言葉にとりあえず頷きました。

「王子も知つての通り。秦は沢山の都弓千を中心に発展しています。しかし発展するには素材を加工しそれを需要と消費する事で経済の基本が作られます。都弓千では各地領主の納める村街の素材がここに市場に集められ加工販売されています。食料、衣服、人形、情報つても商品となつていきます。泰爛ではここ漣些大市場、北の金武ほらこないだ芝居見に行ったところ、そして西の手亜そしてなんといつても一番有名なのは、南の泰爛水上市場あそこは泰爛を縦断する啓洪の中にあつて船を使って売り買いするんです。すごいですよ。んな大きな牛を船にぎゅうぎゅうに乗せてるんですよ。・・・プツプツ牛だけにギユウギユウって、どう王子ねえ」

「川の上の店か面白そうだな」

「いや違いますよ、牛だけにギユウギユウって」

王子の顔を覗き込み、鴻飛は言いました。

「物知り博士だな」

王子の答えに鴻黄はテーブルにのじをかきながら、調理場の方へ仕方なく目をやりました。

「だから・・・まあね二回も三回も言っちゃうとね・・・ッていうか、不老長寿の薬探して、色々行かされましたからね」

「ほー」

王子は鴻黄のこういった話が好きでした。

「王子秦は広いです、ですが大抵の事は図書館に書いてあります。そして必要な事は王子の学ばれている天地経典で間かなはれます。しかし闇、人の心の言葉に出来ないものは感じる事しかありません。」

「ふーんでもな鴻飛、ここは金で動いておる。経済の原理、真理がこの者達の全てを言葉に出来るぞ」

「ん？」

鴻飛はあたりを見回しました。

「かもしんない」

鴻飛は二度首を前後に振りました。

「ばか、そんな単純なものではない人間というのは「つえ」

「政だ、この市場も政からすれば全て言葉に出来るという事だ。人それぞれ

のこの市場における闇など俺に分かるわけがない。つま知ってどうなる事も、どうすることも・・・俺には関係ないだろう。」

「うーん」

また、鴻黄は自分の世界に入り始めました。

「秦の闇は帝になる俺の闇。しかし人々それぞれの闇など・・・どうしようもないであろう」

「うーん鴻飛には難しくよく分かりません」

鴻黄は片目を瞑り空を仰ぎ答えました。

「お前が俺に説いてるんじゃないのか」

「ええ、そうだったの」

ビックリした顔で王子に言いました。

「じゃあ、お前は何を言いたかったんだ」

「だ・か・ら・牛だけにギユウギユウっていうね、このーギャグを
ね」

鴻黄は両手を鳥のようにはたつかせ王子に訴えました。

「・・・下らん、いくぞ」

王子は立ち上がりました。

「どこへ？」

「・・・知らん、お前が連れてけ」

蒼龍 四神を纏えし者 其の七 泰爛西広場

鴻飛と王子が市場でそんな会話をした頃、宮中の西広場では先日の賊を逃がした事で三人の若者達が目隠し猿靴葉の状態で処刑台に縛られ公開処刑が執り行われておりました。

そして話は少しさかのぼりまして朝、謁見の間に三人の若者とそれぞれの部署の上官と神官達が集められ帝様に公開処刑の報告の辞が行われておりました。泰爛を収めている泰爛大使たいし甲棟人コウトウスイが読み上げる罪状そして選抜された経緯の帝様へ報告の辞には、皆三人の若者の首から下を強く見開いて見つめていました。少しでも目を細めよなものなら、首の後ろに抑えている涙を止められなかったからです。

そんな中、帝様だけは冷たい眼差しで三人の若者の顔を見つめられておりました。三人の若者は自ら名乗りをあげた者ばかりで、他にも沢山手を上げた者もいましたが、人選を絞り家族の無い者の中からさしあたり人数の調整のつく部署から選ばれました。

帝様は、甲棟人の読んだ書面を受け取るとだまって目読されました。帝様をご覧になつてる間そこにいた者達は一様に、胸のうちより湧き出る恐怖に襲われたそうです。帝様から発せられるそれは、さつきまで己が抱いていた悲しみなどみじんにも消し去られ。ただただ、帝様の発するそれに怯えるのみでした。一人一人に三人の帝様が、背中と胸と目の先に矢を向けられてる感覚だったそうです。初めて接する若者達は奥歯をぎゅっと噛むものの、膝と頭はガクガクと震えて止まりませんでした。二枚目の書面に目を通すと帝様はグシャッと丸め後ろにほうり、一枚目を軽く見直し三人の若者を見つめました。そして細い冷たい眼差しで、三人の若者に優しく言葉をお掛けになりました。

「礼は言わぬ・・・悪いのはお前らだ」

そう言うのと罪状の記された書面を若者達に突きつけました。その一

言に三人の若者達の眼からは涙が溢れました。抑えていた死という恐怖、家族、知人達への未練、決意した後悔、捨てたはずの生への執着、そして無いと解かっていたはずなのに心の奥底で期待していた希望、全てが涙として視界を曇らせ深い闇に飲み込まれたのです。「そうに違いないのだな」

泣き崩れている若者達に帝様は優しく問いました。

「そうに違いないのだな」

帝様は声を荒げ怒鳴りつけました。神官達はその情景にただ傍観するしかなく、誰一人として帝様にも三人の若者達にも声を掛ける事など出来ませんでした。帝様はしばらく三人の若者達を見ていると書面をしまい、耳たぶを触りました。

「聞こえぬか」

そう言くと神官達を見回しました、しかし誰も帝様と目を合す事など出来るはずもありませんでした。帝様は大きくため息をつくと手を変え反対の耳を触り、天井を見つめました。これを見た神官達はひそひそと声を掛け合いますが、誰一人良い案も声を掛ける者もおりませんでした。そんな中泣き崩れていた一人の若者が声をあげました。

「私の責任で宝物庫の警備が行き届かなく、警備兵5名が死に十四名に重軽傷多大な損失を負わせてしまいました。この責任は、死をもつて償わさせて戴きたく参りました。」

これをお聞きになった帝様は、耳の手を下ろすと細い冷たい眼差しでこたえました。

「わかった・・・硅胤を呼べ」

そして硅胤は、三人の若者の体を隅々まで最後の診察をしました。若者達はそれぞれ重い病氣と怪我をわずらっていたのです。

三人の若者は、処刑台の上で何を思い何に願ったのでしょうか。読み上げられる罪状、民衆の声、宮中のそして帝様の目。三人の若者達は抗う事無く己を律し時を辿った。自心他真、人の心とは外的要因について過去の経験に基づきどうすれば自己利益につながるか

にある。天智經典の中に出てくる言葉の一つであります。三人の若者に感情が無かったわけではありません、そしてそれを押さえつける理性も使命も正義もありません。あるのは闇と時間と事実でした。メラメラと立ち上がる炎、足は熱さから痛みに変わり、体は生を求めあがきます。感情が悲鳴をあげ、声を荒げ激しく体をのたうちまわします。グサリ 若者の体に無数の矛が突き刺さります。足元に槓がくべられ若者達の体を一気に炎は飲み込んでいった、その炎は一つの闇を消した・・・そして多くの者に闇を植え付け。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8292e/>

酔拳

2010年10月10日06時54分発行